提言

みんなで支え合う社会に向けて
～ドナルド・マクドナルド・ハウスの紹介～

（東大ハウス　ハウスマネージャー代行　藤本氏　インタビュー要旨）

公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン　東大ハウス

ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン

1　ドナルド・マクドナルド・ハウスとは

ドナルド・マクドナルド・ハウス（以下ハウス）は、家から遠く離れた病院に入院や通院をしているお子さんや、その家族のための滞在施設です。子供の入院生活は病気の種類にもよりますが、長期に及ぶこともあります。そのような中で、治療に付き添う家族の心や身体をリセットする時間と場所が必要だと考えています。ハウスは、そのような家族が心身を休め、リフレッシュしてから再度お子さんの待つ病院にまた戻っていくことができるよう、「Keeping Families Close（どんな時でも家族が一緒にいられるように）」という合言葉を掲げてスタッフやボランティアが活動しています。



図１　東大ハウス

2　ドナルド・マクドナルド・ハウスの起源

スタートは今から50年ほど前のアメリカ、フィラデルフィアです。当時、有名なアメリカンフットボール選手だったフレッド・ヒルさんという方の娘さんが白血病にかかり入院しました。娘の入院中、彼が目の当たりにしたのは、付き添う家族の肉体的・精神的・経済的な負担でした。患児自身は病院で医師や看護師さんのケアを受けることができます。しかし、周りの家族は、わが子の小さなベッドの横に小さくなって寝たり、床にバスタオルを敷いて寝たり、駐車場の車の中で夜を明かしたりと実に過酷だったそうです。

子供のためならと、付き添う家族が我慢し、乗り切っていたのでしょう。けれどこのままでは、お子さんの病気が治る前に家族が倒れてしまうことになりかねない。そこでフレッド・ヒル選手は小児科医からの助言を参考に、家族のための滞在施設を病院の近くに作ろうと、募金活動を始めました。これにマクドナルド社をはじめ、様々な企業や個人が協力し、1974年に第一号ハウスが誕生しました。世界中で、寄付や募金・ボランティアによって家族の滞在施設を運営していくことになりました。現在では全世界で約380か所ものハウスが療養中のお子さんや家族に寄り添っています。日本では、2001年に国立成育医療研究センター（世田谷区）に「せたがやハウス」という国内初のハウスが設立されました。（東大ハウスは2011年12月に設立され、国内８番目。）

3　東大ハウス職員になったきっかけ

私は、ここに勤めて３年が経とうとしていますが、その前は他の仕事をしていました。子育てが一段落し、時間や自分自身にゆとりができたので「感謝の気持ちを込めて何か社会に貢献したい。」と考えるようになりました。

漠然と何かできないかと探していた所、このハウスのボランティア活動を見つけ、登録しました。当時はコロナ禍だったこともあり、ボランティア活動自体は何回もできたわけで

はありませんでしたが、新しい発見や気づきをたくさん得ることができました。その中の１つとして、家族が大きな病気もなく、健康ですごしてきたということは当たり前ではなかったということに気づかされました。それはとても幸運なことで、大変な状況にある方がいることを知りました。厳しい状況の中で患者とその家族は他の方からは一見可哀そうと思われがちですが、皆さん喜びを見つけて毎日を楽しく前向きに生活をしようとしています。そんなご家族を応援したいと思うようになりました。そんな中、「東大ハウス」を運営する公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンの職員の募集を見つけました。知らない領域、世界を更に見てみたいなと思い応募し、現在に至ります。もしかすると、20代の時にこの仕事を目にしても選択肢に入って来なかったかもしれません。何かピンと来ないというのが正直な所だと思います。ただ、その時はできないかもしれませんが、ライフステージの変化やゆとりが出てから働き始めたり、自分の思考や信念で行動するのもいいのではないかと思います。そこでの新しい発見や考え方に触れ、自分の視野を広げる大きなチャンスだったと思っています。

４　さいごに

現在、「東大ハウス」では私を含め、５名のスタッフがいます。そしてハウスの運営は、スタッフだけでなく、多くのボランティアさんによって支えられており、186名のボランティアさんに登録いただいております。ボランティアは学生から年配の方まで年齢層も幅広く、無理のない範囲で協力いただいています。私たちは「ファミリー・センタード・ケア（家族を中心としたケア）」の実現に向けて医療を社会で支える仕組みづくりに取り組んでいます。これは病気のお子さんとその家族を病院だけではなく、地域や社会全体でも支えていこうというものです。その一端をボランティアの方々が担ってくださっています。ボランティアだけではなく、我々スタッフだったり、商店街のおじさんやおばさんだったり…誰か一人だけで頑張っていく時代は終わりにして、みんなでみんなを支え合いながら共助溢れる社会になっていかないと小児医療をはじめ日本の抱えている諸問題を解決していけない世の中になってしまうのではないかと思います。

私達はボランティアの輪を広げていきたいと考えています。ですが、これは先生方にボランティアに登録してください、ということではありません。例えば、授業や学活・ホームルームの１コマでこういったハウスやボランティアのことを話題にしていただいたり、職員や保護者の方々との雑談で応援するにはどうしたらよいか、自分が今何ができるのかと考えてもらったりすることがハウスのみならず、ボランティアの考えや支え合いの社会の輪が広がっていくことにつながるのではないでしょうか。

今回の記事に掲載できなかったハウスの情報・活動については右の二次元コードからご覧ください。